日本農業新聞　2014年(平成26年)1月3日(金曜日)

ブランド化に貢献！

青森県藤崎町 トキワ養鶏

飼料米2割以上給与

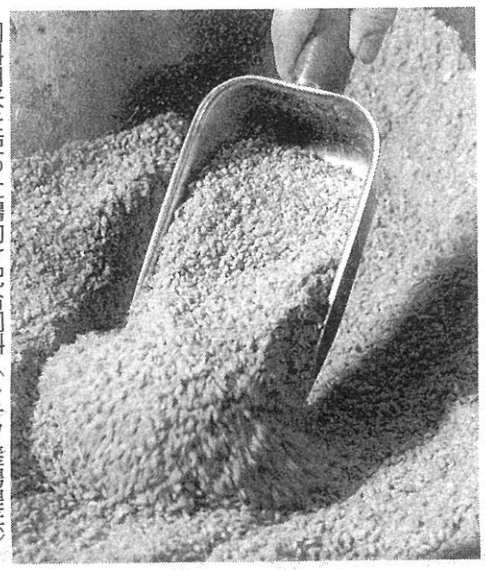
五所川原市の境谷さんから津軽地方の70戸以上の耕種農家から飼料用米を買い取る藤崎町のトキワ養鶏。採卵用に飼育する40万羽の鶏に、年間3800トンの飼料用米を与え、7000トンの卵を生産する。2007年から米を給与し、現在、一般的な卵より1、2割ほど高値で流通するまでのブランド力を築いた。

同養鶏は、契約農家からもみの状態のまま買い取り、自社配合した飼料に2割以上となるように混ぜて給与する。もみのまま与えたほうが、耕種農家は作業が省力化できる。同養鶏にとっても鶏の砂肝や腸が大きくなり、餌の食い付きが良くなるなど利点がある。

自社配合で流通経費の削減につなげるため、同養鶏の飼料用米(もみ)の買い取り価格は1キロ36円(うち7円程度を保管経費などで徴収して実質はおおむね29円)で、輸入トウモロコシと同水準にしている。また同養鶏で発生した鶏ふんを耕種農家に提供し、飼料用米の収量アップにつなげる。

ただ採卵鶏への飼料用米給与は課題も多い。まず栄養価が不足がちになるため、飼料の給与量を1割ほど増やす必要から、生産コストが上がる。また一般的に消費者は黄みの色が濃い卵を好む中、米を与えた鶏の卵は黄みの色が淡くなる。通常は「デメリット」と捉える養鶏業者が多い。

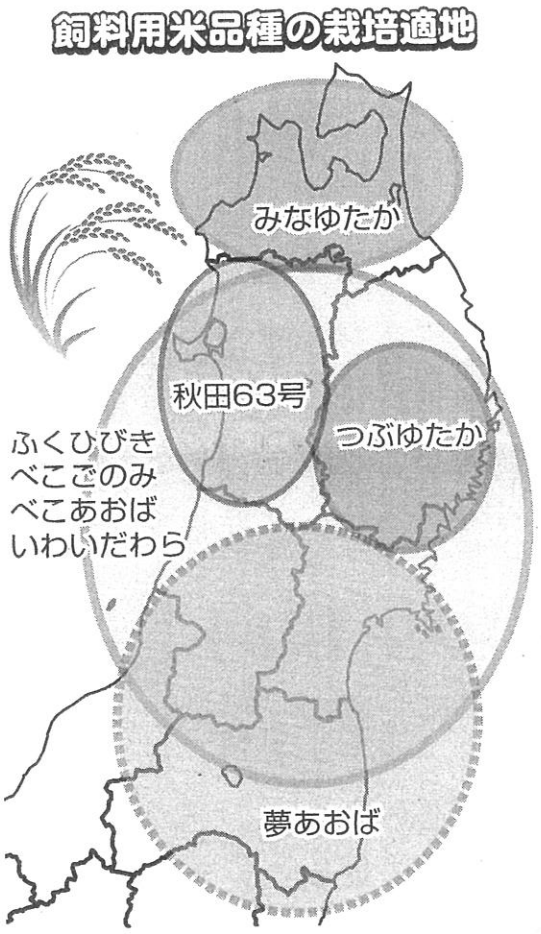
飼料用米を給与して育てる鶏（青森県藤崎町で＝トキワ養鶏提供）



飼料用米を使った鶏向け配合飼料（トキワ養鶏提供）

「安全・安心の証し」に

同養鶏は、黄みの色の淡さを国産米の給与による「安全・安心の証拠」としてPR。首都圏を中心に展開するパルシステム生活協同組合連合会の会員など消費者が、その取り組みを理解した上で、市場流通する一般的な卵より高値で買い支えている。

トキワ養鶏は、飼料用米の取扱量を今後、13年産の6割増となる6000トンまでは可能としている。ただ国内の養鶏業者が同様の取り組みを拡大していくかは、懐疑的に見ている。

同養鶏の古川治組合長は「飼料用米を与えることでブランド力が築けなければ、コスト面などで課題に直面する。消費者といかに結び付くかが大事だ」と強調する。